資 料 提 供

令和３年５月１７日

| | |
|---|---|
| 担 当 課 | 文化振興課 |
| 担 当 者 | 杉本、清水 |
| 電　　話 | （073）435－1194 |
| 内　　線 | 3018 |

# 和歌山市指定文化財の新指定等について

このことについて、和歌山市文化財保護審議会からの答申を受け、次のとおり５件の文化財資料が、和歌山市指定文化財として新たに指定されました（令和３年５月１７日）。これにより、和歌山市指定文化財の件数としては、これまでの７０件から５件増えて７５件となります。

天部立像、和歌山城追廻門及び伊太祁曽神社１号墳は現地でご覧いただくことができます。

| 名　称 | 種　類 | 員　数 | 所在地 | 所有者 |
|---|---|---|---|---|
| 地蔵菩薩立像（じぞうぼさつりゅうぞう） | 絵画 | 1幅（ぶく） | 和歌山市紀三井寺 | 護国院 |
| 天部立像（てんぶりゅうぞう） | 彫刻 | １躯（く） | 和歌山市紀三井寺 | 護国院 |
| 和歌山城追廻門（わかやまじょうおいまわしもん） | 建造物 | １棟（むね） | 和歌山市一番丁 | 和歌山市 |
| 伊太祁曽神社１号墳（いたきそじんじゃごうふん） | 史跡 | １基 | 和歌山市伊太祈曽 | 伊太祁曽神社 |
| 圓珠院資料（えんじゅいんしりょう） | 歴史資料 | １件 | 和歌山市秋葉町 | 圓珠院 |

## 新指定１．地蔵菩薩立像　１幅

**～　麗しのお地蔵様は地獄の救済者　～**

穏やかで端正な相貌を持ち、右手に錫杖、左手に宝珠を持って踏割蓮華座上に立ち、画面左上から飛雲に乗って飛来する地蔵菩薩像です。輪郭を金泥の隈で立体的に表した雲斗や精緻な截金文様を施した着衣、錫杖や装身具などを彫塗であらわすなど、全体的に華やかさの中に静謐な趣を湛えるなど鎌倉時代後期仏画の特色がよく表れています。鎌倉時代には六道救済の仏として地蔵菩薩への信仰が高まり、特に南都（奈良）では、春日三宮の本地仏を地蔵とすることもあり、地蔵菩薩像が多く造られました。なお、宝珠を高く捧げ、雲斗にのる点などから快慶の地蔵菩薩像の系譜を引くと考えられます。

地蔵菩薩立像は令和元年～２年度に実施された調査により新たに発見された和歌山県内における数少ない中世仏画の優品であるだけでなく、中世における紀三井寺と南都との関りが窺える遺品として極めて貴重です。

## 新指定２．天部立像　１躯

**～　紀三井寺の伝説の竜神様？　～**

本堂厨子後方の小壇に安置される榧とみられる一材から彫り出した寺伝では観音菩薩と伝えられてきた像です。やや厳しさを残した風貌、量感のある立ち姿など１０～１１世紀の作風を示しています。蓋襠衣をまとった天部の姿は、紀三井寺の縁起において為光上人に七種の宝を授けた竜神を思わせるところがあります。

このように紀三井寺の縁起とも関連するような造形であるというだけでなく、和歌山市内では数少ない１０～１１世紀の貴重な作例といえます。

## 新指定3. 和歌山城追廻門　1棟

### ～　名所図会にも描かれた赤い城門　～

和歌山城追廻門は、城外の扇ノ芝に馬場があり、そこで馬を追廻していたことが門の名前の由来とされています。鏡柱２本と内側の控柱２本から構成されており、２本の鏡柱上に冠木を渡して小さな切妻屋根を被せ、鏡柱と内側の控柱の間にも小さな切妻屋根を被せています。また、切妻の両側に破風はなく、直接石垣に接しています。追廻門は昭和 58～59 年に行われた解体修理時の調査で、主要部材に当初材が多く残っていたことが判明しています。当初材の垂木の形状から創建時期は寛永期よりは古くなることが指摘されおり、元和年間までさかのぼることになれば、徳川頼宣による砂の丸と南の丸の造営時期とも一致することとなります。

和歌山城では、重要文化財である岡口門をのぞくと現存する江戸時代の建造物は追廻門と井戸屋形のみであり、追廻門は江戸時代の和歌山城の景観を現在に残す貴重な文化財と言えます。

## 新指定４．伊太祁曽神社１号墳　１基

### ～　紀氏一族の奥津城か？青石の石室　～

式内社である伊太祁曽神社の境内にある古墳で標高約 20m の丘陵上に築かれた円墳で、同一丘陵上に築造された３基の円墳により伊太祁曽神社古墳群が形成されています。３基の古墳のうち内容が判明している１号墳は直径 16m、高さ５ｍの規模で、内部主体は西側に開口する両袖式の結晶片岩を小口積みした横穴式石室です。奥壁に石棚１枚、・石梁２本、低い位置に両側壁に組み込まれた屍床をもつ、和歌山県北部に特徴的な「岩橋型」と呼ばれる石室の代表例の一つです。出土遺物は確認されていませんが、石棚・石梁の両方を備えるという完成された石室の特徴からみて、横穴式石室の盛行期である古墳時代後期（６世紀）の築造と判断されます。

## 新指定５．圓珠院資料　１件

**～　和歌山城の鬼門のまもりは火伏の神様　～**

圓珠院は紀州徳川家初代の頼宣の命により京都愛宕社から和歌山城の鬼門の護り、城下の火伏として勧請された愛宕権現社の別当寺です。和歌山城や歴代藩主の護持に関連する祈祷や法要を行うなど江戸時代を通じて藩と緊密な関係を結んできた紀州徳川家ゆかりの寺院であることから、６代藩主宗直書写の「紺紙金字般若心経」や弁天堂および本堂（旧愛宕社）内の宮殿型厨子をはじめとする藩主やその周辺の人々が関わった遺品が多く残されています。また、享保年間の愛宕社の屋根葺替は城下の人々から広く寄付を募っておこなわれており、それに関連する台帳等が残されています。この享保の修繕における体制は以後、「享保の先例」とされ直近の明治 30 年代の境内建替えにまで引き継がれてきたことが圓珠院に遺された文書群からうかがうことができます。

圓珠院資料は和歌山市内に残る数少ない紀州徳川家との関係が明確にうかがわれる資料群であるだけでなく、社寺の修復における勧進の実態がうかがえる資料群でもあるという点においても重要です。

紺紙金字般若心経

旧愛宕社宮殿型厨子